The Japanese Association for Behavior Analysis(JABA)

2C06 日本行動分析学会 第33回年次大会
(2015年8月29～30日 明星大学)

自閉症児に対する逆向連鎖を用いた指導がジャンケンエコラリアに及ぼす効果

The effects of backward chaining and fading on reducing inappropriate imitation during rock-paper-scissors game in children with ASD

○塚本 匡・竹内康二
(明星大学大学院) (明星大学人文学部)
Masashi TSUKAMOTO, Koji TAKEUCHI
[a](Graduate School of Meisei University) [b](Meisei University)

Key words: rock-paper-scissors, backward-chaining, prompt-fading, autism spectrum disorder

問題と目的

自閉症スペクトラム障害(ASD)児のジャンケンの特徴として、出した自分の拳を相手と同じものに変えてしまうジャンケンエコラリアが挙げられる(野村, 1993)。本研究では、ジャンケンエコラリアを含む不適切な行動連鎖が形成されているASD児を対象に、ジャンケンの指導を行った。代替行動としての勝ち負けの判断とその弁別刺激を連鎖に組み込むことで、ジャンケンエコラリアを減少させ、勝敗の結果に合った行動を増加させることを目的とした。

方法

参加児 重度の知的障害とASDのある小学校5年生の男児1名を対象とした。指導開始時、参加児は、ジャンケンポンのかけ声に合わせて手を動かしたり、グー、チョキ、パーの形を見て、正確に命名したりすることができた。また、「誰?」という声かけに対して、人物の名前等で応答することができた。日常では、勝って嬉しがったり、負けて悔しがったりする様子が認められず、保護者からは勝ち負けの概念を獲得させたいという要望が出されていた。

標的行動 ジャンケンのルールに従って勝ち負けを適切に判断することを標的行動とした。その形態に関しては、指導期間ごとに異なる反応を正反応とした。ルール学習期1と2では、「勝ったのは(負けたのは)どっち?」という声かけに対して「グー」のように拳の名前で応答することを、ルール学習期2と3では、「勝ったのは(負けたのは)誰?」という声かけに対して「僕」のように人物の名前で応答することを、それぞれ正反応とした。

手続き 1) BL 複数の指導者が、参加児と1対1で、ジャンケンを行った。指導者から「ジャンケンポン」と声をかけ、アイコの場合には「アイコでしょ」と仕切り直し、双方が異なる拳の形を出したところで「勝ったのは誰?」と尋ねた。ジャンケンエコラリアが認められた場合は、少し間を置いてから、最初に出した形に参加児の拳を戻して勝敗を尋ねた。参加児の行動に対しては、淡々と応じた。

2)ルール学習期1 パソコン(PC)教材を用いて、チョキとグー、グーとパー、パーとチョキの各組合せに対して、勝った方の拳の報告を求める弁別訓練を行った。これ以降の訓練期では、参加児の正反応に対して、賞賛や遊びをバックアップ強化子とするトークンを与えた。PC教材には、それぞれの拳の形を左右に並べたものを使用した。各教材には、刺激内プロンプトとして勝った方の拳の名前を呈示した。参加児のパフォーマンスに合わせて、透過性を変更し、フェイディングした。

3)ルール学習期2 PC教材を用いて、アイコを加えた3すくみの勝ち負けの弁別訓練を行った。「勝ったのはどっち?」に対して安定して正反応を示すようになったら、参加児の馴染み深い人物の写真を加えたPC教材を用いて、「勝ったのは誰?」と尋ねた。

4)ルール学習期3 身体ガイダンスと逆向連鎖を用いて、対人場面におけるジャンケンの指導を行った。「ジャンケンポン」のかけ声に合わせて、(1)拳の形を作らせて指導者の拳との間で勝ち負けの判断をさせる、(2)腕を伸ばして(1)、(3)腕を振って(2)の順に訓練し、ジャンケンエコラリアを起こさせないように既存の行動連鎖を組み替えた。参加児のパフォーマンスに合わせて身体ガイダンスを徐々にフェイディングし、連鎖の初めからジャンケンを行うようにした。

5)般化テスト BLと同じ手続きを用いた。

結果と考察

BL1において、参加児はすべての試行でジャンケンエコラリアを示した。さらに、3すくみの勝ち負けを正しく判断できるようになった後も、依然としてジャンケンエコラリアが高い確率で認められた(BL2)。身体ガイダンスと逆向連鎖を用いた訓練後に、参加児は適切にジャンケンを行うようになったことから、ジャンケンエコラリアを低減させるためには、すでに存在する行動連鎖に直接働きかけていく必要があると考えられる。

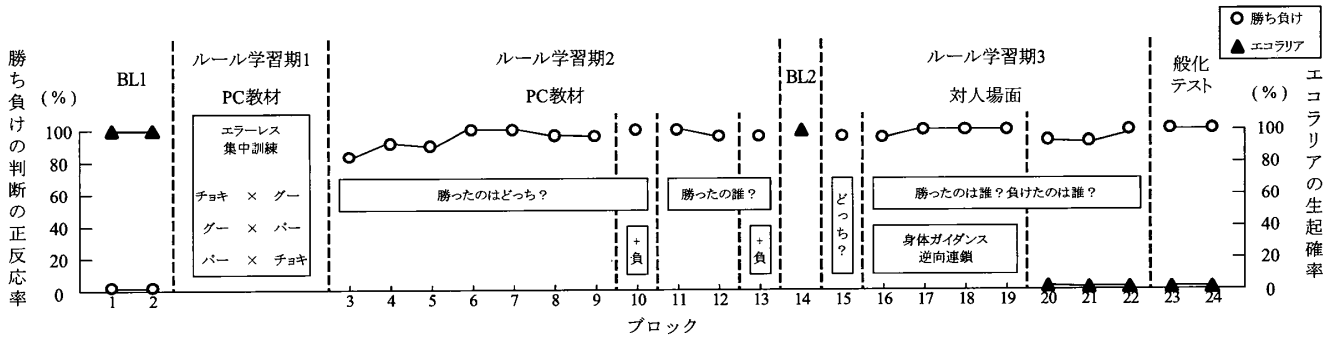

Figure1 勝ち負けの判断の正反応率およびジャンケンエコラリアの生起確率の推移

NII-Electronic Library Service